



病院を見守る中庭の樹

ちょうどその頃、合併したての東御市が打ち出した、病院の付近に福祉センターなどを設置し、医療と福祉を一体的に提供する「福祉の森構想」に関心を抱き、当時の東御市民病院の事務長へ自分からアプローチしたそう。

事前に見学に訪れた際の第一印象は「静かな病院」。また、玄関を入ってすぐの中庭に一本の木が植わっていて、泰然と立つ姿がひどく胸に刺さったという。「その光景に、なんだか安らぐ病院だなという印象があった。医療とは直接関係ないけど、あの印象が今でもずっと残っている」と語る岩橋先生にとっての病院のシンボルツリーは、大切に手入れされながら、今も中

地域医療最前線

東御市民病院

○病院の概要（令和2年度実績）

病床数：60床

病床稼働率：66.5%

平均外来患者数：248.4人／日

救急車搬入患者数：323人

人間ドック等受入数：2,350人

職員数：129人（常勤職員／令和3年7月1日現在）



東御市民病院外観



東御市民病院

岩橋 輝明 院長

東御市の地域医療連携を

深める地盤をつくる

長野県の東部、浅間連山や蓼科、八ヶ岳など雄大な自然に囲まれた東御市。市の半分以上が山林、4分の1が田畑で、日照時間が長く水はけの良い土壌によって良質のブドウを始めとする農作物が生産されている。個性的なワイナリーが集まり、世界に誇るワインバレーとして発展している他、天下無双の力士・雷電の生まれ故郷や、先のオリンピック金メダリストがトレーニングを行ったアスリートパーク湯の丸などで知られる、多彩な魅力あふれる都市だ。

東御市は、小県郡東部町と北佐久郡北御牧村が合併して誕生した。東御市民病院は、かつて東部町で地域医療を支えてきた東部町立ひまわり病院を前身に、福祉・医療・介護を一体的に提供することを目指し、新築移転して規模を拡大。平成16年の東御市発足に伴い、今の病院となった。

取材をお願いしたところ、新型コロナウイルス感染症対応などで多忙な中にも関わらず快諾いただき、時節を見

て、初めての試みとしてオンラインでお話を伺うことになった。

地域医療ができる場を求めて

院長の岩橋先生は信州大学医学部を卒業後、神経内科を専門とする同大学内科学第三講座に入局した。神経内科専門医として専門性を高めながら、「専門以外の知識がない専門馬鹿ではいけない」という医局のモットーに則り、より多様な知識と経験を身につけるため、内科標榜科に勤務することもあるそう。現在も神経疾患に限らず幅広い内科疾患全般を診療する。

以前勤務した病院では神経内科医長として、救急医療の場で脳血管障害の急性期を診ることが多く、慢性期の患者さんにじっくり向き合う時間が取れないことに悩んでいた先生。神経難病などの慢性期を支える診療や在宅医療を含め、より患者の生活に寄り添った診療に基礎を置きたいと考えていたという。

庭に鎮座して訪れる人たちを見守っている。

俯瞰し把握する 看護職の副院長

岩橋先生が着任した当初は人もそれほど多くはなかったが、徐々に医師が増え、それに伴って患者数や要望なども増え、だんだんと忙しくなってきたそう。今では、病院規模に対する外来患者数は非常に多い部類に入る。それでも、着任当時に感じた地域に寄り添う親密さは変わらないそうで、「無理なく、らしく働ける病院かなと思います」と笑う先生が、今や最も長い時間を過ごす病院となっている。

一方、新納看護部長は今年から副院長を兼務している。東御市民病院で看護職が副院長を務めるのは初めてのことでそう。

「看護師って医師のそばで仕事もしていて、患者さんの一番身近にいるので、俯瞰した感じで全体が見えていると思う。そういうところで役に立つのではと思われたのかも」と拔てきの理由を分析し、「歴代の看護部長たちがそういう立場で仕事をされてきた。私も頑張らないといけないなと思っています」と、爽やかな決意を語ってくれた。



新納 郁子 副院長兼看護部長

幅広い対応で 地域に安心感を

東御市民病院の理念にある「地域に密着したプライマリケア・センターを目指す」は、多少の表現の相違はあれど、前身である東部町立ひまわり病院設立時から継続して掲げられているものだという。

プライマリケアにおいて重視されるのは近接性と包括性だ。病院では、助産所との連携や小児科の診療、診療所と協力した高齢者の在宅医療の支援から、人間ドック等による予防医療など、さまざまな診療科・年代を対象とした全人的な医療の提供で、東信地域におけるプライマリケアの一翼を担っている。

地域の要望には可能な限りで対応し、できるだけ市民の安心を得られる

課題は継続性への 不安要素

情報提供も安心を感じてもらう方法の一つだ。「今年度は広報に力を入れています」と説明してくれたのは岩下事務長で、「病院がどんなことに力を入れて、どんな病院になろうとしているか」をアピールしているという。



岩下事務長

現在は、感染症に関する周知などについて医師が原稿を作り、CATVやラジオなどで広報番組を放送している。特に、コロナ禍での健康管理や運動不足解消のためにできることを、専門職が出演して広報しているそうだ。



病院の一つの問題点だ」と岩橋先生は眉を寄せた。

相互理解で リリーフ体制を取る

東御市には東御市民病院の他、みまき温泉診療所、助産所とうみの2つの施設がある。従来はそれぞれの施設がほぼ独立して運営していたが、今年から一体的に運営していくように変更となった。助産所では、妊産婦の体調不良などの際に、すぐ病院で診られるように体制を強化。また、新納看護部長が助産所の状況に目を配り、人員交流も行うなど、相互に積極的な介入を進めている。

助産所との連携についてはコロナ禍が一つの良いチャンスになったという。大規模な集団接種会場の運営は病院看護師だけでは手が足りず、助産師たちにも協力を仰ぐことになった。現場では看護師も助産師も一緒に仕事に立つので、自然と交流する機会が増えたそうだ。

新納看護部長は「お互いの職場を良く知る機会を作ること、病院としても産婦人科外来に助産師の力を借りるなど、必要時に助け合う関係性を今後でも維持していきたい」と意気込みを語った。

市全体の訪問診療を 底上げする

一方、診療所では主に訪問診療に力を入れてもらい、検査や入院が必要な場合などはすぐに病院へつないでもらうようにしている。

逆に、病院への入院後、身体機能の低下などで退院への不安がある場合にも、診療所へ訪問診療をお願いすることで患者さんが退院帰宅することができるといふ。「家に帰ると元気の回復が加速する方も非常に多い。訪問診療の重要さは見えているので、その連携が今後もスムーズにできれば」と語る先生。

また、病院に地域医療部を設立し、地域連携室スタッフや診療所、東御市の福祉担当者などの密な情報共有の拠点としている。今後は地域の開業医とも連携し、緊急の夜間診療など対応



オンライン取材の様子

吃音への理解を広める 「ことばの外来」

総合病院として多くの診療科を有する中、周辺地域に類を見ない科として「ことばの外来」がある。主に吃音（きつおん）障害の患者さんへ、医師と言語聴覚士が治療や訓練を行っている。「小さなお子さんから大人の方まで通われていて、ずっと継続している方も、新規にご相談に見える方もいます」と新納看護部長。

外来での治療だけではなく、近隣の学校に吃音への理解を深めてもらう取り組みを進めたり、患者さん同士のグループが体験を話し合う場で勉強会を行うなど、活動の内容は多岐にわたる。

「ことばの外来」では初診予約がメールで行えることも特徴的だ。発話に不安を感じる患者さんの受診が容易になるため、「その辺の事情も考えて少

しずつ見直していった。こういう温かいところや丁寧な対応が、継続して患者さんたちが通ってくる理由なのかな」と新納看護部長は目を細めて教えてくれた。

疾患や障害そのものへの対応だけでなく、患者さんの困っていることを拾い上げてこまやかに改善していく姿勢に、東御市民病院が地域で必要とされる理由の一端を垣間見た。

教育が風土を作る

今までは各部署で研修等を行っていたが、今年から院内全体での教育委員会を立ち上げた。これは、単に個人のスキルアップのみにとどまらず、この病院で生き生きと働ける職場環境を作ることが目的だ。

病院を今後も継続して発展させる「好循環」を生むために、まずは中間管理職を担う人材育成が大切だと新納看護部長は考えている。従来の、それぞれがプロとしての実力も意欲もあるのに、部署ごとの壁が間を阻んでいる状況に危惧を抱いていたそうだ。その壁を少しずつ低くし、自部署のことも同時に病院全体、ひいては「地域のため」を見えるようにすることで、自分の役割を考え、目標を共有できるよう促していく。

地域ならではの 健康づくりを考える

人や組織の強みに焦点を当て、肯定的な人間関係の形成や、それに基づくマネジメントを、講師を招いて勉強する機会を設けている。数を重ねることで、それぞれのやりがいや成長を支え、地域のニーズに応えられる組織を目指すという。

「みんながやりがいを持ったり、自分の意見がしっかりと伝わる組織だと実感できる。そんな風土を作る役割を、教育委員会に担わせてもらいたい」とし、まだ劇的な変化はないが、今まで以上にスタッフ間の距離が縮まって対話の機会が増え、少しずつまとまりつつあるように感じるとのこと、今後の経過が楽しみだ。

地域医療がうまくいくためには、地域そのものが活性化することが必須だと岩橋先生は考えている。東御市がどういう地域性があるかを知り、そこをどのように医療で支えるかを考えなければいけないとし、ただ医療を提供するのではなく、スタッフ一人ひとりが、「自分の住む地域を活性化させる工夫を考え、取り組むプライマリケア」が東御市民病院の目指す地域医療の姿勢なのだ。

東御市の名産品として知られるワインとクルミを例に挙げ、「僕は神経内科医なので、認知症予防に良い成分の話になり、例えばこれらを利用して認知症予防や改善する街づくりができないかと考える」と先生。あるいは市内の特色ある運動施設を活用した介護予防の取り組みなど、幅広くアンテナを張りつつ、具体的な市民の健康増進につなげる方法を模索し、「この地域ならではの特色を出した健康づくりの方法ができれば」と強調した。

また、そうした特色ある取り組みを発信することにより、新しい医師が興味を持って来てくれる可能性もある。人材育成につながり、課題としていた医療の継続性についても好循環に変わることを期待している。

病院には非常に勉強熱心なスタッフが多い。岩橋先生はその意識を、より地域の活性化という視点へも向けるよう促し、一人ひとりが自主的に「自分のできる地域医療は何か」を考えてもらえるような環境を作りたいと意欲をのぞかせた。

終わりに、お二人に座右の銘を尋ねてみると、岩橋先生は「Be natural Be yourself」、新納看護部長は「相手の役に立つよう適した努力をする」との



病院からは湯の丸高原が一望できる